



堀太一ステップス初個展である。堀は1985年岐阜県生まれ、2010年武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業、2013年多治見市陶磁器意匠研究所修了、加藤孝造の薦めで「丸沼芸術の森」にて活動をしている。

堀は絵画を六枚、常滑焼を四点、装飾した常滑焼を一点、箱のオブジェ二点、ポウル陶器二点、皿二点、デミタス五点、マグカップ三点、カップ六点、本一冊を出品した。



堀は在学中から、人間と宇宙の関わりを明らかにする錬金術に関心を持っていた。その為、錬金術を主題とする作品の制作を続けているという。その延長線上にあるのが、本の制作である。やはり在学中に建築と共にデザインを学んだので、自己の世界の具現化に役立っている。



堀にとって常滑焼が表す首、肩、胴という三筋壺は、人間の肉体構造である。肉体には装飾が必要だ。装飾された常

滑焼の制作を続けるうちに、土偶が土の中で浮かぶことからボックスタイプの作品が生まれた。それは、「丸沼芸術の森」で活動する様々なアーティストから刺激を受けたことも関与している。堀は自らの思想の探究に没頭するのではなく、他者の意見を広く受け入れる感受性を持っている。自らの外にある世界に目を広げ、体を投げ出していく行為は、先細りしている日本の文化の世界の中で、これからのアーティストには必須の条件になっていくのであろう。



肉体構造である常滑焼に対して、精神構造として絵画＝「診断書」を堀は制作する。《意識/脳細胞》(左上)《背骨》(左下)《神経》(右上)《眼圧》(右下)を主題としている。人間が人間であり得る条件を理的に探っているように見えても、そこに描かれる世界は錬金術を前提にしていることもあって、とてもユニークに展開する。



堀はこれから平面、立体に捕らわれずに、私達が想像出来ない世界を生み出していくのであろう。自らで自らを定義してはならない。飽くなき探求の力にこそ、未来が託されているのだ。

